4．教育実習レポート

教育実習を通して感じた教育課題

末松　美郷

Ⅰ．はじめに

私の実習校は、尼崎市立大庄中学校である。大庄中学校は、もともとあった大庄西中学校と大庄東中学校が統廃合されてできた新しい中学校である。私自身、大庄西中学校の最後の卒業生である。校舎も新しくなり、制服も変わってしまっているので自分の母校という気持ちは最初感じることができなかったが、生徒は活発で人懐っこい子が多く、だれにでも元気に挨拶ができる様子を見て、私たちが通った中学校の雰囲気がそのまま受け継がれているように感じられた。統合された学校であるため、二つの中学校から教育実習生がやってきたので6人の教育実習生が集まった。実習中は科目にかかわらず、6人が協力して助け合い励ましあい、実習生間の絆も深めることができた。私は、2年生4クラス160人の英語の授業を担当させていただき、2年3組をホームルーム教室として受け持たせていただいた。このレポートでは、私が実習期間中に授業を行い、生徒を観察する中で感じた教育的課題を論じていく。

Ⅱ．2年生の状況

2年生全体の雰囲気は、活発で授業にも部活動にも積極的に取り組む姿勢がつよく感じられる。しかし、女子はおとなしく何事にもまじめにしっかりと行うが、その一方で男子は落ち着きがなく、いつも先生に注意されるのも男子である。驚くことに、授業開始のチャイムが鳴る前に音楽が流れ、先生が教室に全員入るよう呼びかけを毎時間行っていた。チャイムが鳴って、机に教科書を準備して座っている生徒はクラスの約半数である。先生が、大声で注意してやっと授業が始まるという様子であった。まず、学習に対しての姿勢、休み時間から授業への切り替えをしっかりと身に着けさせることから始めないといけないと思った。また、授業内では「先生の説明を聞きながら先生の言ったポイントを書く」ということができない生徒もいて、「生徒にさせることは一つずつ」ということにも驚いたのは事実だ。また、指示の仕方も“Open your textbook.”“Take your pencil.”など、本当に作業の一つ一つを指示しなければならなかった。慣れない最初の頃は、指示の出し方一つが難しかった。

英語の授業に対して生徒は前向きに取り組んでいたが、よく理解している生徒と全く理解できていない生徒との学力差が顕著に見られた。尼崎市が市内の中学校の生徒を対象に行っている「尼崎市立中学校学力・生活実態調査」(2012) によれば、大庄中学校の2年生の英語の授業に対しての評価は以下のとおりである。英語の授業について、「わかると感じている生徒は 42.8%」、「半分くらいわかると感じている生徒は 20.6%」、「わからないと感じている生徒は 36.6%」いた。市内平均では、わかると感じている生徒 53.3%、半分くらいわかると感じている生徒 22.5%、わからないと感じている生徒 24.0% という結果がでており、市内平均よりも大庄中学校の英語授業の理解は低い結果となっている。次に、「英語の授業は好きか」という問いに対して回答は次のようなものである。好きだと答えた生徒は 54.9%、好きでないと答えた生徒は 45.0% であった。市内平均は、好きと感じる生徒 61.1%、好きでないと感じる生徒 38.7% となっている。このように、英語が好きと感じている生徒も市内平均より少ない。理解できるからこそ、授業が好きだと感じられるのではないだろうか。また、生徒の興味を引き出すような楽しさを授業に含ませ、生徒の理解を重視した授業をどのように行っていくか現実の課題を感じた。

Ⅲ．課題1「授業への切り替えと授業の活動間の流れ」

上記のように、私の実習校の生徒の実態を述べてきたが、ここからは実習校における私が感じた課題について論じていく。まず一つ目の課題として、「授業内での切り替え」がある。Ⅱでも指摘したように、生徒は休み時間から授業への切り替えができない生徒が目立つことが大きな問題だと考える。また、授業内での指示一つとっても、「ここまで言わなければダメか」という程度のこと必要とする指示まである。授業だけではなく、生活指導でも指導していくべき観点であるといえる。日々の学校生活の中で、クラス単位ではなく学校全体での指導が重要であろう。

また、私が感じたことの一つに教師が生徒の限界をつくってしまっているのではないかと思うことがあった。「生徒はここまで用意して示してあげないとできないから」という場面が多々あった。生徒が本当にできないのかどうかは私にはわからなかった。教師が、全てをお膳立てしてしまうことによって、生徒はそれに甘えてしまうのではないかと思う。瀧口 (2003) によれば、生徒に表面的には幼いところがたくさん残っているのも事実であるが、それは親や教師がいつまでたっても子ども扱いをするからである。したがって、英語の授業の中でも生徒を大人としてどのように扱っていくのかがポイントになる (p.5)。生徒をいつまでも子どもだと捉え

るのではなく、生徒の発達段階を踏まえて、生徒を一人の人間として尊重していくことが必要であると考える。そして、何より授業を受けたいという気持ちにさせることが必要だ。楽しみな授業であれば、生徒は自発的に学習意欲をみせ授業に取り組むのではないだろうか。「英語は嫌い。みんなと騒いでいるほうが楽しい。」と思わせるのではなく、「休み時間も楽しかった。今日の英語は何をするんだろう。」と生徒がわくわくして授業を楽しみにするような英語授業を行うことも、生徒の学習に対する動機づけの一つの要素になりうるし、モチベーションを高めることにつながるはずだ。そのために教師が行うべきこととして、しっかりとした「教材研究」である。「50分の授業で、何をポイントとして何を教えるのか」を明確にした授業デザインを行うためには、教師が授業で取り上げる単元について熟知していることと、授業の流れを頭に叩き込んでおくことは必須条件である。

また、私が休み時間から授業へと入ることの切り替えとして授業内で行っていたことがある。初歩的なことかもしれないが、必ず英語で授業はじめのあいさつを行っていた。あいさつの続きで、簡単な英語での questions を与え、答えさせた。質問内容は、「昨日の放課後何をしたか？」など、生徒の自分にかかわる事柄を設定し、学習単元が過去進行形であったことから過去のことを尋ねる質問を多くした。あいさつと questions によって、生徒はまず英語の時間なのだと頭を切り替えることができると同時に、question に答えることで既習事項の復習を行うことができる。また、英語で答えることで発音の活動にもなる。その流れで、声を出させるためにフラッシュカードで新出単語の発音練習を行っていた。その際気を付けていたことは、流れを崩さないことである。まず、あいさつで英語を発音し、questions でも話す活動を行っているので、そのまま単語を大きな声で発音できるように、「話す、発音する時間」としての流れをつくった。「今、何をするのか」「何を目的とした活動を行うのか」という活動の意味を明確にしておくことが重要であり、教師が常に留意しておく事柄だといえる。

実際、同じ1年生担当の実習生の英語授業を見学させていただいた際に、「切り替え」が本当に重要だと実感した。その授業では、教師の説明には一切英語は使われず、ほぼ8割ほど日本語で行われた。まず、最初のあいさつも日本語で始まり、生徒は「英語の時間だ」という切り替えが全くできておらず、緊張感がなかったように思えた。Classroom English も全く使われることなく授業がすすめられており、生徒が英語に触れる時間がほとんどなかった。切り替えがうまくできていないので、生徒もだらだらと授業をしている状態が続いた。やはり、最初に英語であいさつから授業を始め、questions に答えさせ英語を発声させることが、生徒にとってよい刺激になっているのではないかと感じた。

また、改善したい点として questions において生徒と教師の interaction が一問一答という雰囲気で終わってしまっていた。生徒が英語で会話を続けるための単語力が不足しているということも理由の一つに挙げられると感じられるが、教師による questions に対して生徒がせっかく答えた回答を「Very good!」で終わらせるのではなく、もう一つぐらいでも答えに対して踏み込んだ質問を続けてもよいのではないかと感じた。そのためには、やはり生徒が英会話に対して慣れることが重要であると考える。私が観察し、授業を行う中で英語を話すことに抵抗がある生徒は各クラスに数人は必ず見受けられた。まだまだ生徒たちは、speaking 活動には不慣れなのである。太田 (2007) によれば、英語が話せるようになるためには、やはり話をすることが大切であると同時に中学校の段階では慣れることがとても重要となる。そのために、教師ができることとして以下の3つが挙げられる。1．いろいろな場面で生徒に声を出させる。2．ちょっとした場面でも生徒に話しかける、生徒同士で話をさせる。3．手軽にできる Speaking 活動を行う (p.46)。つまり、教師は様々な場面を通して生徒に英語を使わせる場面を設定し、与え続けなければならないのだ。簡単な会話を行うことができるようになるためには、十分な input を必要とする。授業ででてきた文法事項を理解し、生徒自身で活用できるように練習量を増やし、定着を図ることも重要である。その定着を確認する意味もこめて、生徒間で会話練習などの Activity を取り入れることが必要である。

Ⅳ．課題Ⅱ「教科書の活用」

私の指導教諭の授業は、教科書1セクションを1時間で終わらせていた。ほとんど教科書は内容の確認としてのみ使用し、教科書にそれ以上の出番はなかった。私も2セクション分の教科書の授業を担当させていただいたが、授業内で行ったことは「教科書本文のリスニング」、「Reading aloud」、「生徒がノートに本文を写す」、「日本語訳の確認」、「文法事項の確認」のみである。教科書の内容テーマについては、どのようなことが書いてあるのかを読めているかという確認のみで、それ以上は言及しなかった。教科書に書かれている内容テーマを深めることは、ほとんど行っていない。その分、導入の授業や Activity の授業では自由に教科書にとらわれない授業ができた。正直なところ、導入の授業と教科書の授業では生徒の反応が全く異なっており、教科書の授業はだらけることが多かった。生徒は授業に満足していないのだと感じた。確かに教科書の取り上げる内容が、生徒の興味関心を惹くものだとは言い難いことも事実だ。しかし、行われている授業スタイルでは単に英語という言語的な知識を与えている授業で終わってしまい、読み取った内容が生徒の中に残るような授業ではない。これでは、塾や予備校で行う授業と大差がない。もうすこし生徒に教科書を利用して教科書の内容を深め、自分の知識として蓄積していける授業を行うことができるのではないの

かということを考えていきたい。

瀧口 (2011) によれば、「よい教材」を教師が生徒に与えることが重要である。「よい教材」は、その教材の中身を通じて、生徒たちの豊かなメッセージを伝えることができるものである。また、英語に対して閉じた生徒の心を開けていくための教師の鍵でもある。つまり、「よい教材」は、教師が生徒に英語の楽しさを訴え、英語をわかってもらいたいとエールを送る機会をつくり、「英語がわからない」と逃げていた生徒に前を向かせる機会を与えるものである (p.16-17)。これらのことから、生徒が「英語をわかりたい」と思うような教材は、内容が充実しており教師からのメッセージが含まれているものだといえる。しかし、現在中学校においては文部科学大臣による検定をうけた教科書を使用して授業を行うことが定められていることと、地方自治体によってどの検定教科書を使うのかも決められているという縛りがある。教師が自ら生徒にぜひ学んでほしいと思う教材を探してきても、それを授業で扱うことが困難であることも事実である。また、教科書が扱う内容が、すべての生徒の興味関心に応じたものにはなり得ない。そのため、教師は日頃から自分の生徒にはどのような教材が適しているのかを考えておく必要がある。教科書を使うことで、様々な制約がでてくることも考えられるが、いかに工夫して授業を楽しいものにするかは、教師の腕にかかっているともいえる。さらに、内容を考えさせる授業を行うことは、生徒は英語を学ぶと同時に生徒の「心の教育」にもつなげていくことができるのではないだろうか。

私が実習校で行った教科書の授業は、ほとんど教科書に書かれた内容を深める活動を行わない。しかし、工夫次第でもっと教科書を活用できるはずだ。例えば、インターネットから関連資料を取り込んで写真をみせる、物語であれば、実際に DVD を鑑賞するなど、すこし時間と手間をかければ多くの活動ができる。実物を持ってきて生徒に見せることも、新鮮で生徒の関心を高めると考えられる。文法指導や教科書に書かれている英語を理解することももちろん重要であるが、それらにプラスして内容テーマを深める活動を、授業のまとめとして取り入れ、生徒の心に残る授業をすることが必要であるのではないかと考える。

Ⅴ．課題Ⅲ「英語を書くことへの抵抗」

私の実習校では、生徒たちの「英語を書くこと」に対して、できる生徒・できない生徒の差が特に顕著であった。生徒たちは、英語を聞いてリピートすることやリスニング活動に対しては、さほど苦労せずに取り組むことができる。しかし、「では、今聞いたことと同じ文章はこれです」と言って英文を見せ「読んでみなさい」と言うと、できる生徒とできない生徒が分かれる。そのために、私は何度も口頭練習を行った。指導教諭にも、「まず口で覚えさせることから始めるように」との指導を受けていた。何度も口で音を練習し、覚えてから英文を見せるという流れの授業を行った。英文を見せてからも、読むことができるようになるまで口頭練習を行った。十分慣れてから、「書く練習」を行ったが黒板に書いてある英文をそのまま写すことすら難しいという生徒も多数おり、書くことへの苦手意識がとても強かった。つまり、生徒たちは「音で認識したものを文字として認識すること」が難しいのである。これは、2011 年度から始まった小学校での外国語活動が関係していると私は考える。私の実習校の生徒は、すでに彼らの小学校では外国語活動を行っており全員が経験していた。そのためか、英語を聞くことや発音することにはあまり抵抗を示さない。生徒たちは、英語の歌を聞く活動や教師が英語で簡単な instruction を行うことにもすんなりと対応していた。それが、「読むこと」「書くこと」になると、全くできなくなる生徒も実際にいた。中学校学習指導要領解説 (2008) をみると、小学校の外国語活動の目標は、「外国語を通じて，言語や文化について体験的に理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，外国語の音声や基本的な表現 に慣れ親しませながら，コミュニケーション能力の素地を養う」と記載されている。それとともに、実際の外国語活動の中身は英語を使ったゲームなどを行ったり歌ったりと「勉強」という感覚ではなく「楽しむ」ことが実際のところである。あくまで生徒は「英語に慣れ親しむ」ことが目標なのだ。よって、英語を実際に書き、まとまった英文を読むことは活動内容に含まれてはいない。読み書きの活動の経験不足となっているのだ。よって、中学校に入り英語の文を読み書きする際に音と文字とをうまくリンクさせることができないという結果を招いている。また、外国語活動の雰囲気で、中学校の英語の授業が行われると思っていた生徒には大きなイメージ・ギャップが発生し、英語に対する苦手意識を増長させていることも考えられる。このような問題は小学校で外国語活動が始まったことにより、これからの中学校でよくみられる問題になるのではないだろうか。

これを改善させるために、Phonics が有効であると考える。三浦 (2008) によると、Phonics とは、綴りと音声の規則およびその指導を意味する。Phonics では、数段階に分けて基本的規則から提示していき、次第に例外も含めた規則の習得を促し、最終的には未知の語でもその発音が綴り字からある程度予測できるようになるというものである。指導者には、ある程度の知識や指導技術が求められる (pp.152-153)。

生徒は単語を発音するときに、スペルを一緒に学ぶことができる。この指導法は、EFL(English as Foreign Language) の生徒に有効だと考えられている。Phonics である程度学習していれば、簡単な単語は読むことができるとともに、綴りを覚えることができるので単語レベルであれば書き取りもできる。Phonics を、小学校の外国語活動で取り入れることで、中学校での英語授業とのギャッ

プを埋めることにつながるのではないか。外国語活動は、まだ始まったばかりであるが、早期に活動の具体性を深めて形あるものにしていくことが重要である。そのために、小学校と中学校との連携が必要であり、学校間での情報の共有が求められる。

Ⅵ. おわりに

3週間の教育実習を通して、様々な学校における諸問題を目の当たりにすることができた。英語教科に関する問題、学習全体に関する問題、生徒指導の問題など、山のように課題があった。実際に現場の空気を吸うことで、「教師」としてのものの見方、考え方、行動をとることができるようになった。授業を行うにあたっては、生徒は協力的で自分の描いた授業を行うことができた。もちろん、授業に関して課題は残ったが、いい勉強をさせてもらうことができた。生徒指導に関しては、教科指導のように事前準備ができるものではなく、その場での指導が求められる。しかし、日ごろから生徒を観察し、生徒とかかわっていることから問題に気づくこともできるということを学んだ。充実した3週間であったと同時に、自分の勉強不足に気づかされ続けた3週間でもあった。あと半年の大学生活の中でさらに専門教科である英語、現在の教育についての学びを深めていきたい。

参考文献

尼崎市立大庄中学校 (2012, 2,15).『学校評価 平成 23 年度 学校評価』(2012, 7,25)http://www.ama-net.ed.jp/school/j10/cat570/
大田洋 (2007)『英語を教える 50 のポイント : Tips for English Teachers 』光村図書出版株式会社
瀧口優 (2003)『【アイディア集】「苦手」を「好き」に変える英語授業』大修館書店
三浦省吾 , & 深澤清治 (2008)『新しい学びを拓く 英語科授業の理論と実践』ミネルヴァ書房
文部科学省 (2008)『中学校学習指導要領解説 外国語編 』開陸堂

※実習校の授業に対するコメントは本学生が受けた印象であり、検証されたものではない。

教育実習の経験をこれからの英語指導にどのように活かしていくか

小島 縁

3週間の実習を通して、英語を実際に教えてみて初めてわかること、感じることがたくさんあり、様々なことを学ぶことができた。上手くいかない時には、どのように改善を行えば良いかと考えることで、少し上手くいきそのいった瞬間にやり甲斐を感じることができた。そのような瞬間がこれからたくさん得られるように、実習で学んだことを今後の英語指導で活かしていくために、実際に学んだ事と今後どのように活かしていけば良いかについてまとめる。

1. 準備

まず初めに授業をするにあたって、準備をすることがとても大切であると学んだ。英語の授業をするためには、教科書とノートを開いてでは魅力的な授業はできない。よって、学ばせたい事によってワークシートを作る準備や、伝えたい内容を考える、50分の授業の流れをしっかり構成し、頭に入れるということが必要であると学んだ。準備をしっかりとすることで、50分の授業を有効的に使えることができる。準備をしっかりとしなければ、時間を持て余したり、伝えたいことが伝わらず、学ばせたい事を学べないということになる。よって、50分の授業をどのように使うかをしっかり準備をし授業を行うことが大切であると実感した。

実習中自分でワークシートを作った際、何を活動させるのか、何を学習のメインに置くのかを考え、どのように明確な説明をするかをしっかり考えワークシートを作らなければいけないと思った。また、ワークシートの例文がターゲットとなっている文法や用法にふさわしいか、間違いがないかという点にも気をつけなければならない。そういった点を考え、一つのワークシートを作るには、とても時間を要し、何度も訂正を繰り返し大変であった。しかし、その作業がとても重要だと感じた。ワークシートの回答のさせ方やワークシート自体が分かりにくいと、生徒はどのように書けばよいのか、どのような活動をすればよいのか分からず、生徒が自分が考えていたことと異なることをしてしまうという結果が起こるということを実感した。また、実習中にテストを作ると事はなかったが、実際にテスト作るとなれば、さらにテストの回答させる指示が明確でなければ、採点をする際何を正解となるのかが難しくなるのではないかと感じた。よって、授業の構成や学習の目標をしっかり考える準備や、ワークシートなどの授業をするための準備物をしっ

かりと準備することが大切であり、しっかりしなければいけない点だと考えた。

2. 明確な指示

授業をするにあたり、明確な指示を与えメリハリをつけるということがとても重要であり、指示を伝え、メリハリのある授業をすることの難しさを感じた。明確な指示とは、授業の中で今何をするのかということです。生徒が今は何をすべきなのか、例えば話や説明を聞くのか、ノートに書くのか、繰り返し発音をするのかということを行動する前に指示をしっかりと伝えることがメリハリのついた授業をするためには大切である。しかし、そうはいっても簡単にできるものではなく、しっかりとした授業の流れが必要であり、その為に前に書いた準備・計画することと繋がってくるのだと思う。授業に流れを考え、それをしっかりと頭に入れテンポよく行うことが大切だと痛感しました。メリハリのある授業でなければ、生徒達はたちまち違ったことをしだしたり、聞いていない生徒が出てきて、何度も同じ説明をしなければならないということになってしまいます。したがって、生徒が今何をすべきなのかをしっかりと伝え、メリハリのある授業を行うことが、授業をする上でとても重要な土台となると感じた。それができていることによって、様々な活動が活きてくる。

3. 一人ひとりの活動・様子をしっかりとみること

さらに、授業を行う際に重要だと感じたことは、一人ひとりの活動や様子をしっかりと観るということである。前に立っている際、常に全員の顔を見渡すようにし、今、生徒がしっかりと話を聞いているか、活動しているかを観ることが重要であると感じます。授業は教師が一方的に知識を与えるのではなく、常に教師と生徒間、また生徒同士が相互作用し合いながら行われるべきだと感じた。また、前に立っていると一部しか目に入っていないということも多々あった。そうした場合分かっていない子がいても授業がそのまま進められてしまうため、ついていけない子が、授業が進むごとに増えていってしまう事態となる。よって生徒の様子や反応をしっかりと場面ごとに観て確認をするということが授業を進めていく上で重要であると感じた。

さらに、個人やペアなどの生徒のみの活動の際には机間指導がとても重要である。教師が机間指導を行うことで、生徒は分からなければ質問をしやすい環境を作れるのではないか。そのような生徒が教師に質問をした際、それが他の子たちにも起こりうる質問ではないかと考えることも必要である。一人の子がした質問はクラス全員にも当てはまる質問だと判断した際には、全体でどんな質問があったのか、それに対しての回答を全員で共有する時間を作るということも授業作りに重要な事だと感じた。他の子の質問によって他の生徒のわかっていない点に気付く事ができ、新たな学びとなることができると考える。

4. 臨機応変に対応すること

授業を行っていく中で、臨機応変に対応できるかどうかということもとても重要であると感じた。授業をどれだけ準備していても、その通りに進むということは難しい。そのような時に重要なことは、その時の状況に応じて計画していたものを臨機応変に変えるということが必要であると感じた。また、生徒からの質問により必要と思えば、流れを中断し、説明をするなどといったことが必要である。教師は授業をするにあたり、計画通りに進まないということは多々起こりうるけれども、そういった時にどのように対応するかが求められていると感じた。また、それは授業内だけでなく生徒指導の場面においても必要だと感じた。生徒指導の場面では様々な事柄があり、決して例に当てはめるということはできない。よって、教師がどのように対応するかが問われるため、状況に応じて対応するという臨機応変さが必要だと感じた。

5. 日々反省をして改善を行うこと

教育実習中は、2クラスを担当させてもらい6種類の授業をさせてもらった。その中で常に「もっとこうすればよかった」、「生徒があまり理解していなかった」という改善点を見つけるように心がけていた。それをするためには生徒をしっかりと観るということが必要であり、改善点を見つけそれを次行う際に少しでも変えることで、常に良い授業に近づいていけるのではないかと感じた。実際授業をさせてもらい、初めて行った授業の中で見つかった改善点を次の授業で行うということを繰り返し行った。例えば、活動を行う際の説明をもう少し時間を取ってしっかり行うことや、新しい文法をの導入を英語で行う際には、英語を少しゆっくり話すことを心がけ、1回のみ言うのではなく何度も繰り返すということなど、たくさんの改善点を見つけ出すことができ、次の授業に活かすことができた。実際教師になった際にも、毎回の授業を流すのではなく、振り返るということが必要であり、自分の授業を客観的に観て改善を繰り返していくことがとても大事である。それを繰り返すことで本来の目標である、生徒が英語の授業を楽しいと感じたり、もっと学びたいという意欲に繋がってくるのではないかと考えた。

6．様々な指導法の組み合わせ方

大学の授業ではたくさんの指導法・教授法を学んだ。それをどのように組み合わせ授業を構成するかも、教師にとって大きな課題ではないかと感じた。私の実習先では学年ごとに担当の先生が異なり、指導法も先生によって異なっていた。実習での授業は担当の先生の流れを土台とし、先生が行っていない方法や活動を取り入れさせていただき授業を行うことができた。担当の先生の授業の流れは、教科書1ページを2時間で行う。教科書の内容や文法事項によって、内容は多少異なるが大まかな流れは下記のような流れで行われた。導入の際にはパワーポイントを用いて、新しい文法事項の表現を Oral introduction で導入された。様々な写真を使うことで、生徒は興味を示しているように思えた。また、本文を CD で聞くという時にその前に導入した文法事項が出てくるため、生徒はそこの部分を注目して聞けていたのでないかと感じた。しかし、生徒はメモをとる欄が用意されているのであるが、担当の先生の授業を観察させてもらった際には、何を書けばいいかわからない子を多く見かけた。そこで、私はマッピングを取り入れ聞こえてきた単語でも何でもいいから情報を書き込むようにと説明をしてから行った。そうすることで、話しの中で聞こえてきた単語などを一ずつ繋ぐことを通して本文の内容を大まかに捉えられるようになっていたのではないかと思った。また担当の先生の方針として覚えるくらいに音読を繰り返し行うということがあった。なので、様々な音読法を取り入れ何度も音読する機会を与えるということを取り入れておられた。

このように、実習中には担当の先生の指導法を崩さずに行ったが、実際自分が担当になった際には、自分で指導の流れや目標を設定しなければならず、その時にまず大切にしなければならないことは、その学校や学年の生活環境を知り出来ること、少し難しそうなことなどを判断しなければならないのではないかと感じる。私の実習校は落ち着いた雰囲気の中で生徒が授業を聞くという体勢が整っていたため、比較的色んな事に取り組めると感じた。しかし振り返りの中で、他の実習校での様子を聞いていると、まともに50分間授業をすることさえ難しいといった学校もあるということを知った。よって、自分の授業スタイルを見出したとしても、それがその学校やクラス、生徒に対応できるかは確かではないということである。したがって、生徒の状況に応じてどのような授業を行うのかをしっかりと見極める必要があるのだと感じた。

1時間目 2時間目

・あいさつ
・前回に習った文法事項の確認のための活動
・新しい文法事項の Oral introduction
・本文の単語の発音・意味確認 :App1
・本文を CD で3回聞きとり（教科書等を見ずメモを取る）
・本文の内容確認（Q に対して日本語で回答を書く）;App2　・あいさつ
・単語確認
・本文の訳を配りそれを確認しながら音読練習＜四方読み、Read and look up、intake reading、シャドーイング等＞ App3
・文法事項確認のための活動

7．教師が授業内・外において英語でコミュニケーションをとること

どんな学校であっても、学校内で教師が英語でコミュニケーションを取ろうという姿勢であることはとても重要であると感じた。まず、私の担当の先生はクラス内でできるだけ英語で授業をしようと心がけておられた。クラスルーム・イングリッシュや指示などはジェスチャーや簡単な言い回しで英語で説明を行うことで、生徒が英語を聞くという機会を多く得ることができ、そういった環境が生徒に英語を話しやすくさせる雰囲気を作っているのではないかと感じた。実習に行った際には、ある程度のクラスルーム・イングリッシュを生徒は理解している状態であったが、初めは全然分からなかったことだろうと思う。しかし、先生が授業で何度も何度も繰り返し言うのを聞き自然に理解できるようになったのだであろう。そういった環境を教師はあきらめず絶えず与えることが英語の授業に必要な事だと改めて感じた。

また、授業外での日常会話の中で、英語を取り入れ話すことで、生徒はさらに興味を示し、もっと知りたいという意欲が湧いてくるのではないかと感じた。実際、実習中にも生徒があいさつを英語でしてきてくれ、何気ない会話の中でこういう時なんていうのなどと質問をしてきてくれた。授業内だけ関わり英語を教えるのではなく、授業外でも英語を学ぶ環境を生み出していくことも言語を教える人として可能なのだと、まさに英語は道具であるということを感じた。

8. 様々なレベルに合った授業

私の実習校では1クラス32人編成でした。32人の子どもの中には、少し学習障害のある生徒など様々なレベルの子たちがいるため、どのレベルに合わせて授業をするのかがとても難しい点だと感じた。レベル別の少人数のクラスであれば、ある程度レベルは分散しない。しかし、32人のクラスでの授業の際どのレベルに合わせ授業を行うかはとても難しい点であると感じた。

実習中、「レストランでのオーダーの仕方」のページを授業させてもらった。その際本文に出てくる食べ物ではないものをチャンツで導入するということを行った。その食べ物はほとんどが外来語で、英語と日本語の発音の違いも生徒が感じることができると思い取り入れた。中学2年生にとっては、少し幼稚すぎるかなと感じていたが、いつも音読練習やアクティビティでは、スムーズについていけていない子が、とても楽しそうにリズムにのり発音していました。その様子を見て、いつものレベルはこの子には難しいんだなとその時思いました。色んなレベルの子がいれば、色んなレベルの教材を取り入れることが必要なのではないかと思った。そういった授業づくりを通して、1回の授業でも英語を学ぶ、使うのが楽しいと思える授業作りをしたいなと感じた。

3週間の実習を通して、今まで大学で学んだことを実践し、更に学ぶことができた。様々な課題はあるが、常に目の前の生徒にしっかりと向き合うことが1番大切なことだと感じた。また、常に自分自身の課題を見つけ、教師として向上心を持ち続け授業を作っていきたい。

効果的な授業とは

森下　好香

この小論では、2012 年 6 月 4 日から 6 月 22 日までの 3 週間、私が実際和歌山市立城東中学校に教育実習へ行き、体験したことから発見した効果的な授業について述べていく。まずは、城東中学校の英語教育の実態を紹介し、その中で英語教育に携わり気づいた点とともに効果的な授業、効果的な方法であるか述べて、結果どのようなことが効果的であるのかを、これから必要であると考えることとともに述べるように展開する。

1. 和歌山市立城東中学校

私の出身中学校である和歌山市立城東中学校では、平成 23 年度より、総務省の「フューチャー・スクール推進事業」と文部科学省の「学びのイノヴェーション事業」の研究指定を受け、パソコンや電子黒板など ICT 機器を使った授業改善に取り組んでいた。私が教育実習に行った平成 24 年度では、これらの機器を駆使しながらグループ学習を中心とした共同学習も実施しており、いつでもどこでもつながる新しい学習スタイルの提案と ICT 環境整備ということから、タブレット端末「ARROWS Tab Wi-Fi」とクラウドを活用した英語学習も開始していた。

英語教諭は 3 名おり、1 年生では TT 指導が行われ、2 年生、3 年生では、一般的に 1 人の先生に対してクラス生徒が全員という授業形式で授業が行われていた。

カナダのリッチモンド市立ロンドン・スティーブストン中高等学校と姉妹校提携を結んでおり、隔年ごとに訪問を繰り返しており、平成 24 年度では、2 年生から 17 名の生徒がカナダへ訪問したそうであった。他にも姉妹校があり、私が教育実習へ行っている間にも、アメリカから中高等学校の生徒が本校へ来日し、集会が行われ、放課後には、生徒同士英語で会話してコミュニケーションをとっている姿が見られた。

3 年生では、国際的なコミュニケーションを実施する企画も授業内で設けられており、シンガポールの中学校とスカイプで、日本、和歌山市とシンガポールの文化などを紹介しあったりしていた。

2. 私が実際に体験し、効果的かどうか

まず最初に、ICT 機器について英語の授業では、効果的かを述べていきたい。1 年生から 3 年生で共通することは、和歌山市立城東中学校では、紹介部分で述べたとおり、黒板ももちろんあるのだが、英語の授業はほとんど、授業の全体の時間と言ってよいほど電子黒板を中心に授業が進められていた。本校では、英語の教科書は New Horizon が使用されていて、その New Horizon 自体が電子黒板に入っており、発音もすべて、tool box や何から何まで全てが電子黒板のみで授業が進められるのであった。文法説明も電子黒板が丁寧にしてくれ、発音練習も電子黒板が発してくれ、教師はただマウスを動かし操作するだけであった。発音に関しても、フラッシュカードをランダムにする、速度の変更、日本語から英語、英語から日本語など、何でも操作が自由自在で、これに関しては驚かされた。本文に関しても、英語を隠して日本語、1 行抜いて表示など、これもこれで驚くものであった。

電子黒板に関して言えば、私は効果的であると考える。その理由は、教師の教材研究に対する時間を削減でき、その上、やはり生徒全員（1 名か 2 名除く）が、電子黒板が発する音声（ネイティブの発音）に沿ってリピートでき、いろんなものがテーマごとに備えられているため注目するからである。教師もその分、生徒に目を配ることができ、生徒が何かに取り組む際にも、電子黒板をリピートで流している間、教師は生徒一人ひとりに机間指導でき、生徒も自然に耳に英語が入ってくるからである。そして、本文以外に教材研究する時間が教師からすると増えるのである。つまり授業を工夫できるのである。導入部分はもちろん電子黒板を使わず、教師がアイデアを出して、生徒が食いつくようなことを考える、こういう時間が教師には必要であるのだ。

ただ、生徒にとっても電子黒板は効果的であるし、教師も復習させる際にはもちろんワークシートなどを作り、生徒にさせるのだが、そこで私が気づいたことは、書くという能力が低下しているのではないかということであった。つまり耳に入り、発音でき、単語も覚え、とすごく口の動きに関しては活発であるものの、書くとなればあまり文法に時間をかけないために、苦手な生徒が非常に多かった。しかし机間指導に時間をかけていたという実態から、そこは教師がわかっていない生徒が多ければ再び文法を、黒板を使って説明していた。つまり電子黒板は効果的ではあるものの、それだけで授業するには生徒がついていくことためには大変だということである。書く面では生徒一人ひとり教科書に従って進めることのできるノートを持っており、予習として単語、本文を写すという宿題が毎回出るのだが、宿題をこなしている生徒は学年が上がるにつれ、減っているのが実態であった。だから電子黒板を使うにしろ、やはり宿題のチェックに時間をかけるのも効果的であると考えられる。

それに加え、本校では、生徒がひとり 1 台の「ARROWS Tab Wi-Fi」を携行し、手書きで自由に書き込みを行うことができるデジタルノート・アプリケーションがあり、これにより、Wi-Fi 機能とクラウドを活用することで、校外でも学校と同じ環境で学習できるため、生徒ひとりひとりの学習進捗にあわせた授業の振り返りや、復習ができていた。また、このアプリを利用して、複数の手書きデータを重ね合わせた表示ができるため、効率的なドリル教材やテストの繰り返し学習ができていた。つまり、教師が不在の間など、生徒は自分のタブレットを持って自習ができたのである。私はその時間も机間指導していたのだが、生徒からは不満の声がすごく多かった。なぜならば、ペンでタッチしながら書くため、うまく反応しなかったり、ピリオドがきれいにかけずバツとなったりと多々見られた。しかし、その反面私が感じたことは、生徒が 1 度解いた問題を、前回は何点で、今回は上がったなど、成果が見られる部分に魅了されたのである。

次に 1 年生で行われている TT 指導に関して効果的かを述べていく。私が一番効果的だと思う授業はまさしくこの TT 指導である。導入の部分では教師 2 人が力を合わせ、いろんな形の導入ができるため、導入部分では、生徒は楽しく興味深く、本当に集中していた。そのため、文法も理解している生徒もたくさんおり、授業の本題に入る際には、1 人の主導教諭が進め、その間 T2 は、机間指導をして、聞いていない生徒には注意しといった形が見られた。発音する際にも、T2 も生徒と一緒に授業に参加し、すごく楽しく、効果的な授業だと思われた。しかし、教諭が 2 人もいるから、教諭同士のコミュニケーションが大切であることが感じられた。やはり教諭同士がコミュニケーションを上手に図れていたならば、授業も楽しいであろう。しかし、それが上手く行かなかった場合には、生徒にも悪影響を及ぼすであろう。

次に、2 年生の姉妹校との交流について述べていきたい。この行事は、2 年生全体の数名のみカナダへ訪問するのだが、やはり各クラスに数名そういった経験をした生徒がいれば、周りも影響され、海外についてのモチベーションはあがると感じられた。授業内で、カナダへ実際訪問したときの写真や動画などを電子黒板に写し、パワーポイントなどを使用し、教師が紹介し、そして実際訪問した生徒もそれについて話し、と英語に関して、外国ってこういう所なのだという情報をクラス内でシェアしあい、これは非常に効果的だと考えた。それに加え、私の教育実習期間中には、アメリカから中高生が訪問し、放課後や部活動を通して、英語でコミュニケーションできる機会が設けられていた、中学生は恥ずかしがり屋や、英語で会話することに慣れていない生徒も多いと固定概念が私にはあったが、実際その状況に足を運んでみると、半分ぐらいの生徒が必至に話しかけていた、私はアメリカ人の生徒から話すと予想していたが、本校の生徒は英語に対しての間違いなど一切気にせず、話そうとしていて、アメリカ人たちは単語を頑張って並べて話す本校の生徒たちを楽しく見ていた、その上、アメリカ人の話す英語を私が予測していたよりも聞き取れていて、これは和歌山市立城東中学校の英語教育のおかげなのかと感じた。聞き取れる部分では電子黒板や、授業がほとんど英語で進められている実態、そして話すことに対しては、なるべく生徒に話させようという教師の気持ちがこもった授業からではないかと感心させられた。もちろん、私もコミュニケーションをスムーズに進めさせるためにアシスタントはしたが、反対に私も楽しめるような雰囲気を本校の生徒からもらった気がする。

次に、3 年生では、私が実習期間中に ICT 機器を利用し、シンガポールの学校の生徒たちと、インターネットを通してスカイプし、コミュニケーションが進められていた。これは効果的な授業であるのかを述べていきたい。クラスで 6 グループを作り、1 グループずつテーマを決め、例えば日本の食べ物、スポーツなどを発表していくのだが、生徒が協力し、英語でパワーポイントを作り、それに沿って、相手の学生たちの顔を見ながら紹介していくという形式が取られていたが、やはり本校の生徒にとっては、シンガ

ポールの生徒が話すなまりの入った英語、そしてスピードの速い英語に困惑している生徒がほとんどであった。反対に、発表する際には、下書きを持ってそれを見ながら相手に向かって話す姿勢を取る生徒がほとんどで、私は、この授業に関しては、実際に生身の英語を聞く面では良いと思うが、発表する際の態度はもっと指導が必要であったのではないかと感じられた。

3. 私が教育実習で体験したことから効果的であると考える英語授業においての結論

教育実習へ 3 週間行かせていただき、いろいろな英語教育に関する実態を見ることができ、体験をもすることができた。私が実習へ行った和歌山市立城東中学校では、教育目標の中の 1 つに、「国際社会に生きる日本人としての自覚を育成し、国際交流教育のより充実と深化につとめる。」と掲げられており、この目標に対しての学校教員の努力がすごく感じられた。しかし、英語教育に関しては、インプット、アウトプットともに努力して授業を考えているだろうと思われたが、やはり生徒の様子を見れば、アウトプットがまだ少ないのではないかと考えられた。

1 年から TT 指導を行い、授業の中で教師が発する言語もほとんど 90 パーセントが英語である点では本当に素晴らしく、生徒も中学生になったばかりだから、これが英語の授業なのかと思い、日本語で答えたとしても、教師は英語で話すよう促し、もう一度英語で答えるよう指示する部分は、生徒たちにとって英語を話すというアウトプットに対して効果的であると考えられた。しかし、2 年生となると TT 指導もなくなり教師 1 人に対しクラス全員なので、やはりスムーズに進めようとすれば、英語で話させる時間が少し削減され、教師がほとんど話し、生徒はただ聞き取り、答える場合も日本語が許される部分があった。私は、3 年間ずっと TT 指導にすれば、もっと効率的に授業が進められ、生徒が話すアウトプットの時間を増やすことが可能ではないかと感じた。アウトプットといっても、やはり教科書 New Horizon に従って授業が進む部分ではすごく残念な気がする。教師は、決められた時間内で決められた分だけ進まなければいけない約束事を持っている。だからこそ、始めのたとえ 5 分や 10 分だけでもアウトプットのウォーミングアップとして、昨日何をしたか、食べたかなどペアになって会話させるだけでも生徒が英語に対しての集中度や、モチベーションがあがると考えられる上、英語で話さない生徒に何かイエローカードを出すなど、徹底的に対処していくべきであると考えた。しかし、生徒は勉強に対して、しなければいけないという思いもあり、そこは教師の腕どころを見せる場を設け、5 分でもよいから生徒が楽しめるミニゲーム（英語のみ使用）や、英語に興味を持たせるために、実際の物を見せたり、外国の文化を紹介したり、こういった工夫が生徒のモチベーションを上げるためにも効果的であると考えた。そうすれば、英語を話そうと 2 年生、3 年生でもなるのではないかと考えた。そして、プレゼンテーションの場も設けるべきであると私は 3 年生のスカイプの授業を見て感じた。やはり日本の英語教育はただ教科書に沿って授業し、話す部分（アウトプット）でもただ単に教科書に関連させて指導するだけであり、私は、ジェスチャーなどを使って相手に伝えようとする気持ちなどをも生徒に教えることがアウトプットとして効果的ではないかと感じた。それを考えるとディベートなども効果的ではないかと考える。ここで私が一番言いたい部分は、英語教育は、本来のただ単に学校で学ぶ英語、学校で使用する教材のみできたら良いという考え方はもう古く、これからは和歌山市立城東中学校が掲げている目標、「国際社会に生きる日本人としての自覚を育成し、国際交流教育のより充実と深化につとめる。」ことが必要であるのだから、小学校から英語教育が実施され始めたことを活かし、まずは、生徒が関心をもつであろう、知らないであろうことを教師は準備し、いろんな世界のことを教え、授業内でプレゼンテーション、ディベート、相手に伝えるためにはどのように話すのかなど、教科書以外の教育も増やすべきであり、そのためには TT 指導で、教師が生徒に目を配る範囲を狭くしていくことが効果的であると考えた。

“英語を教える”と“コミュニケーションをとる”ということ
―教科指導が基本、そのための生徒との関係―

茨木　成美

I. はじめに

短かったけれど 3 週間の教育実習を経て得たものがたくさんあった。今回の実習を通して大きな課題として発見したことがある。それは“「英語を教える（学ぶ）」ということは生徒たちと教師との間に何らかの「コミュニケーション（密接な relation）」が非常に深く関わってくるのだ”ということである。噛み砕いて言うと、“どんなに授業を計画し準備をしたとしても、日々の生徒をよく見て授業中では生徒とより関わるというスタンスで授業を進めていくことをメインに考えなければ、授業は良いテンポで進まない”ということである。そのように授業を進めていく上において、私が“教員になる”ということについてまず大切だと感じたことは「①教科指導をしっかり行う」というのが教員になるための一番の重要課題であるということであった。

①英語の授業（教科指導の基本）をしっかり行うこと（教材研究を含む）について、

・板書やノートについての指導
・テストやプリントについて
・生徒の様生徒をしっかりみて授業外内に関わらず対応すること
（生徒の動線を意識して指導すること）
・興味を引き続け疑問を自分たちで持ってもらえるように
（自発的に学習できるように）工夫を惜しまないこと

などの上記について今回の教育実習での経験を踏まえてまとめたい。

II. 背景

私は京都市立醍醐中学校の 2 年生の英語を実習中に受け持たせていただいた。教材は New Horizon English Course 2 を使用し、担当箇所は Unit4 の“Homestay in the United States”である。この中学校の 2 年生はすべてで 3 クラスあり、1 クラスが 29 人ないしは 28 人からなるものであった。生徒の様生徒はどのクラスも比較的まじめで、授業中に立ち歩いたり授業を聞かなかったりする姿勢の生徒は少なく、指導者が出す指示にもみな比較的真剣に取り組む生徒たちでした。そのため教育実習として教壇に立つと、彼らの本当に素直な授業に対する反応がうかがえて、授業を改善していくためには本当に学びの多い状況であった。反面、生徒指導の面では、比較的「これは指導しなければならない」と強く感じる状況が少なかったため、どこまでを受容し、どこまでを指導すべきかのレベルが自分の中で出来上がっていないため、たとえば忘れ物などに関してはどう扱うべきかなど、難しいと感じた。

III. 教科指導の基本をしっかり行うということ

教員としてしなければならないことは何かと聞かれたら必ず誰しもが第一に「教科指導」だというけれど、教育実習中これをものすごく思い知らされた。文法の説明の仕方（動詞の使われ方など）、板書の仕方、発音指導の仕方からノートの取り方、ファイルの閉じ方、ライティング（文字表記の仕方）、問題などの間違えた個所の訂正の仕方や、生徒の動線を乱さない方法、あらゆる角度において授業をしっかり行うことがまず大切であり、それが教員として教壇に立ち指導をする基盤だなと感じた。

a. 板書の仕方、説明の仕方、ノートの取り方

たとえば文法の説明においても、その時間で扱うものについてはしっかりと研究をしておいて自分が理解をしておくのはもちろん、それを中学生のみんなにはどのように伝えればしっくり理解できるかを考えて準備をしておかなければならない。そして板書をするならば、黒板が情報でいっぱいにならないように「何がその時間のポイントであるのか」を生徒が見てすぐにわかるように、その時間の重要なポイントやその時間に必ず押さえておくべきことなど、シンプルでかつ必要であるものにすべきだと思った。

また単語や文章をノートに取らせる時は、生徒のノートの使い方にも着目すべきだと思った。私は授業内で教科書をカバーする際に、教科書の単語を発音練習や意味取りの練習をフラッシュカードで練習してから、生徒たちがそれをもとにノートをとり日々の学習に使う、という形をとっていたのだが、初めてそのノートを取らす授業の時に授業を終えてから気づいたのが、「生徒ひとりひとりによってノートの使い方や取り方が違う」（黒板の内容の捉え方に差がある）ということであった。担当の指導教官の先生から指導を受け、数人のノートをコピーさせてもらいそれを見せてもらったが、タイトル、日付やどこの勉強をしているのか、ということまでしっかり頭で整理された上でノートをとっている生徒たちもいれば、その日の私が板書したとおりに書いている生徒もいたり、板書の内容が抜けている生徒たちも中には確認でき、これでは学習した内容は確かに同じでも、その後の学習の取り組みなどに差がうまれてしまうということに気づくことができた。ノートを取らすときに大切にすべきことは後から生徒がノートを見て①“その日その時間にどんな学習を行ったのか”ということが分かるようにすること、②ほかの生徒とシェアしても“学んだ内容がお互いに一致し、何を学習したのか共有できるものであること”、だと感じた。それは学んだことを写したりノートにとっても、その生徒にとってその後の学習に効果的に生かせれなければ意味がないからである。

b. 文字のフォントやプリント・テスト類の扱い方

板書についてもう一つ付け加えると、生徒は板書の“色”で覚えるため、たとえば英語の have to を赤にしたならばその日本語も赤にするなど、板書に使われる色に統一性を持たせることも重要だと知った。

書き取りという点で教員が気をつけないといけないことはミススペリングはもちろん、字体についてもである。たとえば、a の表記

やｇの表記が上の部分が突き抜けてるだとか伸びているだとかは統一性をもって使用すべきであると感じた。まだ英語の単語を書きなれていない生徒たちの中には、複数のａの表記法を混ぜて使ったり、中にはほかのアルファベットも同じように混合して使用してしまう生徒たちもいるからである。また、問題やテストの答えの訂正の仕方の指導でも気付いたことがある。生徒の中には間違えた答えを書いてしまったときに答えを訂正する際、消しゴムで自分の答えをすべて消してしまってから、赤ペンですべて書き直すという方法をとっている生徒たちがいた。一見後々見れば非常に見やすく良いように思われるかもしれないけれど、この方法だとのちにどこをどのように間違えたのかという振り返りができず学びにつながらないということに気付いた。訂正する際は、修正部分を線を引っ張るなどして訂正し、別の色のペンで書き直すという指導をするようにした。そして、プリントやテスト類も生徒がそういった修正を加えやすいように、常に情報や文字で紙面をいっぱいにするのではなく余白や空欄を作るということも（余裕をもったレイアウト）工夫すべき一つなのであると気付いた。

授業を集中して行うために、そして静かな雰囲気から授業を始めるために小テストを毎時間の冒頭に取り入れた。そのためテストの解答・解説は日課となりましたが、ここでも気付いた点がいくつかあった。小テストはあくまで小テストであり、“時間に厳粛であること”と“あくまで復習であり時間を割きすぎないこと”への工夫が必要だと感じた。テストは時間を計り、その時間内にできようができまいが打ち切るなどという厳しい姿勢で臨むことが大切だと思った。そうでなければ緊張感をもって生徒たちが毎回のテストに取り組めず、行う意味、復習の必要性を欠いて学習意欲につながらないからである。また、振り返りのテストはあくまで復習であり、既に学習済みである事項やプリントや授業内で扱ったものを取り扱っているのだから、それらとうまく組み合わせて「いかに時間を割かずに以前習った内容を思い出させ、そして次にもつなげられるか」というところをポイントに解答・解説を工夫して行うべきだと感じた。たとえば、再び出てきた事項を1から説明していたのでは時間が足りなくなるのは当然のことである。そのために、以前からファイリングやポートフォリオで記録している教材やノートなどに戻り簡単に復習しながらの解説を行うこと、またテスト内容から大切なもう一度解説すべきポイントをしっかりどう板書にするのかを押さえておいてからテストを行う必要性があると学んだ。

c. 生徒の動線を考えるということ

生徒たちに配付したプリント類やテスト類はポートフォリオ形式でファイリングさせていた。そのファイルの仕方や教科書の開き方など、“生徒の動線について考えること”にも少し工夫をするだけでずいぶんテンポよく授業が進むのだということを知った。私が中学生のころクラスの中に「プリントを忘れました」「プリントをなくしました」という声を聞いたことが多々ありました。そしてたいていその人物は同じだったというケースが多かった気がする。その時は“整理能力に欠けているのだ”とただ考えていた。しかし指導者の小さな指示の工夫を教室内に取り入れるだけで、そのような声を減らすことができるのだと実感した。たとえば1時間の中でテストを返し、新しいプリントを配り、そしてそのあとに教科書を開いて音読した後、ノートをとるという指導計画があったとする。その際、ただ単にその行動を授業内に取り入れるのではなく、生徒にとってどのように指示を出せば動きやすいか、行動を整理しやすいかを考えて指示だしするだけでとても変わる。「テストが返ってきました、小ファイルを机の上に出して閉じてください」「テストを閉じたら小ファイルを閉じて、大ファイルを開いて待ってください」そして全員が開いたら、ここでプリントを配ります。「プリントをファイルに閉じてください」「閉じ終わったらファイルはしまわずに机の左側に置く」そして全員がその行動が取れたのを確認してから「机の右側に教科書を出してください」と言う。このように、生徒にただ単に指示を出すだけでなく、彼らが“しっかりそれに沿って動けているか”、ということを確認すること、そしてそれらを“指導者が確認しやすい方法で指示を出せているか”ということが重要だと思った。

またこの動線づくりに無駄を省くことができればできるほど、授業はテンポよく進む。そして生徒たちがプリントをなくしたり教科書を忘れたりすることが少なくなるということに気付いた。それは先生が生徒の行動一つ一つを“見ているのだ”という意識が生徒たちの中に生まれるからである。同時に指導者も生徒の状況をしっかり把握できると思う。ただ単に授業内で指示を出し、授業を進めるのではなく、大切なことは授業内であれ外であれ、生徒に敏感であれるということだと気付いた。

d. 自発的に発言しやすい環境とは、積極的な発言を求めるならば

英語の授業を英語で私たちが生徒に提供しないといけない場というのは「英語（言語）に触れる、その（言語の背景にある）文化や習慣に触れる機会」と「英語（言語）を話す、使う機会」だと考える。そこで私が実習中に考えていたのは生徒たちにいかに多く、いかに自ら「英語を話す、使う」ということをしてもらうことであった。しかし、英語という普段話さない言語を人の前で発言することは、生徒にとってそう簡単なことではない。自信のない者からすれば、「間違えたらどうしよう」「読み方がわからない」「恥ずかしい」「考えはあるけれどみんなの前で言えない」と、そんなふうに思い発言しないことはしばしばある。

指導教官の先生が取り入れていらっしゃったのはカードにて必ず毎時間1人1回は当たるということであった。そして、教科書の本文については積極的に音読活動を取り入れたり暗唱させたりするなど、とにかく読ませるということを重視されていた。これは「自分で発音（話す）できなければ、自主学習したときにその単語も文章も頭に入ってこない」という考えからでした。

私が実際に先生が普段されているカードで当てるという方法と教科書の本文や扱った教材の音読（英語を話すこと、英語で答えさせること）をたくさん取り入れるという方法を取り入れたとき学んだことが2点ある。1つは、“当てるタイミングによって生徒の発言する英語の量に差が生じないようにすること”。一人の生徒には教科書や板書にすでに出ている文章を発音すればできる問題が当たり、違う生徒には穴埋めをするだけの箇所が当たり、そしてもう一人は自身で完全にターゲット・ランゲージを使って作文しながら答えなければならないという状況があったとする。そうすると、どんなに全員にあてていても、英語を話した量や濃さには差が生まれ、付いてくる自信にも差ができると感じた。また“ターゲット・ランゲージを使って生徒に自分で文章を作らせる努力ができるように当てること、授業内での質問をもっていくこと”が重要だと感じた。主語やターゲット・センテンスだけ事前に黒板などに用意をしておいて、生徒によって文末の内容だけを変えるだけで自分自身で文章を作れる、という状況を作っておき、生徒を指名してゆくと、生徒たちもグラマーの構造が知らず知らずのうちに頭に入っていくことに気付いた。そして、それを一人一人にいかに多く口にさせるかによって定着度は変わってくると思った。

生徒たちに自発的に発言させるには、授業内での雰囲気の作り方にも鍵があると感じた。私がすごく強く感じていたのは「カードで当てれば皆答えられるのに、いざ当てずに疑問を投げかけるとわかっている生徒も答えない」という点である。そこでグループ・ワークを取り入れ、一人で英語を使って考え答えようとするのではなく、グループで考えをシェアしたのちに挙手制で問題に答えてもらうという活動を取り入れたことがあった。その際はいつもとは違い、積極的に英語で文章をつくり発言しようとする姿勢が多々見られた。ここで学んだのは、「ひとり」でも良いのだが「ひとりではない」という気持ちと雰囲気を作り、自発的な発言を促すことに役立てるような授業づくりをすべきなのだということであった。加えて、生徒に意見を求める以上その発言を必ず使うという心構えがないと生徒からの積極的な意見や発言は望めないのだということを知った。その場で発せられたあらゆる生徒の言葉から授業を動かしていく。そしてそれは自分が事前に計画していた指導案から外れないものである。そういった形が理想だと感じた。

実際に3クラスある中でも、私のホームルームのクラスでは、私がカードで誰かを当てる前に誰かが発言してくれるということがありたくさん助けられた。それは、私自身がそのクラスの雰囲気に他の2クラスに比べてなじんでいたこと、生徒たちは「ひとりではない、（私を含むクラスメイトと）いっしょに学んでいるのだ」という気持ちが持てたからだろうと今思う。ここですごく重要だと感じたのが、教科指導外での生徒との関わりや関係がいかに教科指導をスムーズに進めることにつながってくるのかということであった。名前を覚え、顔を覚えるのはもちろん、その生徒たちの部活や普段頑張っていることを知ることで、授業中に話しながら英語の指導につなげて（身近な話題をしながらそれを英語につなげて）いくことが可能になるにはやはり生徒たちと多くの時間を過ごしたくさん関わらないといけないと強く感じた。研究授業は一番関わりの少ないクラスで行われると聞いたとき、必死にそのクラスの生徒たちの部活動を覚え、そしてそのクラスの昼食指導に参加した。後々の話であるが、そういった小さなことでも覚えてくれている生徒や身近に感じてくれてる生徒たちがいて、色紙に書いてくれていたりした。生徒にとって英語を学ぶということをどれだけ身近なものにできるかどうかは「指導者がいかに生徒と身近に関わり、その中で得たものを授業に取り入れて身近に感じさせてあげられるか」であると思う。

Ⅳ. おわりに

3週間の教育実習を経て得た考えがある。それは「失敗を恐れないこと」「全力で取り組むこと」「タイム・マネジメントとその計画をしっかり行うこと」。この三つは私が人間として得たことである。それでもまず第一に教員になるためにすべきことは“教科指導の基本をできるようになること”であると私は考えていたため、今回の実習ではそれが私の目標であった。しかし、それ以上に教科指導のみならず、生活や一緒に過ごす時間、彼らと学校にいること“関わること”が何よりもその基盤である教科指導に密接にかかわってくるのだと本当に感じた。教育実習は教員になるためというよりも、私を人として成長させるためにあったような気がする。これからの将来一番大切にしたいことは、「全力で取り組んだことへの失敗には大きな価値があり後悔はきっとない」ということである。私はそれを生徒や関係者の先生方から学んだ。